

## 自ら学び続ける教職員研修支援事業 活動報告書

グループ名

ぎふ「未来の教室」研究会

テーマ EdTech を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現

## 取組のポイント

## ○主な活動内容

- ・ 2024年6月19日（水） 第1回研究会（オンライン）  
今年度の活動計画の打合せ
- ・ 2024年7月6日（土） 東海ルールメイキング教員交流会（外部研修・オンライン）  
坂高也教諭 登壇 イエナプランについて
- ・ 2024年7月26日（金） 関西教育ICT展 視察
- ・ 2024年8月31日（土） 第2回研究会兼読書会（オンライン）  
奈須正裕・伏木久始編著「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を目指して」を夏季休業中にメンバー間で読み、各自の実践と関連させ、感想を交流した。
- ・ 2024年12月28日（土） 第3回研究会（オンライン）  
2学期の実践を交流した。
- ・ 2025年1月29日（水） 第4回研究会（オンライン）  
今年度の活動のまとめ・来年度の活動計画

## ○取組のポイント

## 1. 「個別最適な学び」と「協働的な学び」について、理論面・実践面で理解を深める。

昨年度の研究は、EdTech 製品の展示会を視察し、製品について話を伺ったり、最新の教育事情について学んだりする機会が多かった。今年度の活動の目的として、教育原理の部分を理論的に学ぶことも据え、EdTech の理解・実践と「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けた教育実践の2つの軸で活動を行った。

「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を目指して」の読書会では、これまで研究会で学んできた教育の情報化や「未来の教室」プロジェクトだけでなく、「令和の日本型学校教育」や「協同学習」、幼稚園での実践など、幅広い教育実践とその理論について学び、これまでのメンバー自身の実践と関連付けて、対話をすることができた。

## 2. 最新の EdTech 製品について情報を得て、効果的な活用方法を探る。

日常的に EdTech 製品について情報収集し、共有するほか、関西教育ICT展を視察し、EdTech 製品を販売する会社から直接情報を集めた。展示会で話を聞き、非認知能力を測定・評価し、生徒や教員にフィードバックするサービスを提供する「Edv Future」社の「Edvpath」を実証的に使う学校があった。

## 3. ICT機器を活用した教育実践を行い、交流する。

全4回のオンライン研究会を開き、各々の教育実践を交流した。特に第3回・第4回の研究会では、読書会や夏季の研修で学んだことをもとに行った各自の実践について、写真や動画を見せ合いながら交流した。

## 取組の成果

### 1. メンバーが実践する教育の質の向上

教育原理について学び、各自が実践を行うことで、昨年度の研究以上に各メンバーの教育実践力が高まったと考える。本研究会は採用6年目以内の教員が多いが、公務外で教育原理や実践を深く学んだり、所属校以外の教員とつながり、教育観をベテランの教員と語り合ったりすることで、各々の実践力を高めることができた。

### 2. メンバーが所属する各学校における、教育実践に対する理解の醸成

研究会での活動が2年間継続したことで、メンバーが所属する学校で少しずつ「未来の教室」に向けた取り組みを浸透させることができた。

EdTechの活用では、各学校で使われているICT端末やソフトウェアを活用した実践について、校内の研修や打合せで情報を共有することができた。また、視察を通じてつながった企業の製品を試験的に使うことができる学校もあった。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けては、各学校の研究とも関連させつつ、メンバーが行う全校研究会などでその要素を含めた公開を行うことができた。メンバーが所属する学校で次年度、自由進度学習を研究に据えることが決まるなど、メンバーが所属する学校へ研究会の学習内容を還元することができている。

### 3. 子どもの変化

メンバーが行う実践を通して、子どもにも変化が見られた。自由進度学習など、研究会で学んだ実践を行うときは、子どもたちがワクワクしながら学ぶ姿が見られた。子どもたちにとっても初めての学習であるため、不安やうまくいかないこともあったが、試行錯誤しながら学ぶ姿がこれまでの授業以上に見られた。学習内容や学習のペースを自分で選択しながら学ぶことで、授業時間いっぱい学び続ける姿も見られるようになった。

## 取組の課題と今後の方向性

### 1 EdTechの活用

2年間の研究会の活動で、EdTechを取り巻く環境が変化していると感じた。昨年度は実際の授業や教育活動で使う製品の紹介が多く見られたが、今年度は校務の効率化や授業外で活用する製品の展示が多かった。GIGAスクール構想も第2期に入るのに合わせ、EdTech製品も精選が進んできたと感じる。

今後は新しいEdTech製品の導入より、各校に導入されているICT機器や端末、ソフトウェアをどのように教育に用いていくかに焦点を合わせ、活動していく必要がある。ソフトウェアを提供する会社は認定教員制度を設置し、認定教員の実践をオンラインで公開しているが、そうした研修会を視聴することはもちろん、大学教員など教育原理の専門家にメンバーの実践を見ていただく機会を、今年度以上につくっていきたい。

### 2 研究会の学びの還元

今年度、研究会に外部の教職員に参加していただくことはなかなか難しかった。今後の方向性として、本研究会の強みである、市町村や校種を越えて教職員がつながっていることを生かし、各校や市町村内外の教職員が参加できる公開授業などで、研究会で学んだことを実践し、県下に実践を広めていきたい。また、こうした各々の公開授業を通して、志を同じくする教職員を本研究会に招き入れ、実践の輪を広げていきたい。